G−15 家庭科教育について，未就学児童及び既就学児童の家庭生活における実態に関する研究 ── 特に「被服」分野について ──

京都女子大 ○岡野 純　　京都教育大 清水 歌

目的　本研究は，家庭科教育が多くの問題を抱えている現実の中で，小学生が家庭科で学習する内容をどの程度，日常家庭生活において実践しているかを知ることにより，今後の家庭科教育のあり方を研究するための，一資料として役立てることを目的とした。今回は，「被服」分野―被服の手入れ　に関する項目について，家庭科を学習していない児童（未就学児童）と，家庭科を学習した児童（既就学児童）とを比較した。

方法　調査対象及び人数は，京都市所在の私立大学附属小学校4校の，未就学児童（4年生）390名，既就学児童（6年生）355名，合計745名の男女児童である。調査の時期は，昭和48年9月17日～10月17日。調査方法は質問紙法により，児童に1週間の期間を各々記入させたものを回収した。回収率は91.3％，有効率は99.7％である。質問事項は，家庭科の学習内容を参考にして，「被服」分野の手入れに関する項目のうち，「つくろい」「洗たく」「しみ抜き」「アイロンかけ」についてである。

結果　「つくろい」「洗たく」「しみ抜き」「アイロンかけ」の実践率は，いづれの場合も既就学児童のほうが高い。すなわち各項目の作業内容をみると，「つくろい」「洗たく」「しみ抜き」は，未就学児童・既就学児童ともに作業内容の，板いやすいものが高率を示している。「アイロンかけ」は危険を伴なう作業ということから，未就学児童は形態的に単純なものが高率を示し，既就学児童は「ハンカチ類」に次いで形態的に複雑なもののほうが高率を示しているのは，学習の成果と思われる。